



新春を迎えて

2011年は、年初の景気回復の期待と年末の厳しい現実の間の落差が大きな年だった。リーマン・ショック後の落ち込みから立ち直り、回復途上にあるように見えた。しかし3月11日の東日本大震災を境に状況は一変した。地震そのものの被害に加えて何百年に一度の規模と言われる津波が多く各市町村に壊滅的な被害を与えた。被災者・犠牲者の多さにおいてまさに「未曾有」の自然災害であった。加えて原子力発電所事故による放射能汚染は、容易に被害を把握・算定できない状況が続いている。

震災直後、サプライチェーンの寸断、電力供給不足、消費者センチメントの大幅な悪化など、日本経済はショック状態に陥った。サプライチェーンの寸断は夏以降、日本企業の懸命な努力によって予想以上の急回復を見せた。昨年中にはほとんど回復したと言える。消費者センチメントの悪化については、昨年の夏ごろ底打ちし、秋になると持ち直しの動きが見られている。

しかし原発事故は関東圏の電力供給に制約を与えただけでなく、日本全体を巻き込んだ電力供給不足問題を惹起した。日本は中長期的なエネルギー政策を見直さざるを得なくなっており、深刻な後遺症を残している。昨年夏、その影響について大和総研が試算したところ、直ちに脱原発を行い電力供給不足が生ずる悲観シナリオでは、2010年代前半、日本の実質成長率が平均0.7%ポイント下振れるという結果となった。また総発電量の3割を占める原子力発電の火力および再生可能エネルギーによる代替は容易ではなく、大幅な電気料金の値上がりが見込まれる。円高とも相まって工場の海外移転の加速による日本の製造業の空洞化という不可逆的な結果をもたらす可能性

が高まると言えるだろう。また二酸化炭素排出量は増加する可能性が高く削減は困難となるだろう。

日本経済は大震災の影響によって2011年度の成長率はマイナスになると見込まれている。12年度には昨年成立した補正予算の執行が軌道に乗り復興事業に支えられて2%弱の成長を達成することができると予想される。世界経済は2011、12年度ともに先進国が1%台半ば、新興国が6%を超える成長が見込まれ、世界全体で4%程度の経済成長を続けると予想されている。

個別に見ると、米国経済は住宅バブルの崩壊とその後の市場低迷の影響から抜けきれていない。各種統計では好転の兆しも見えるが、失業率の低下ははかばかしくなく、当面緩やかな成長にとどまるであろう。中国経済は昨年秋まではインフレが懸念されていたが、その後インフレ率は低下した。当局は金融引き締めから金融緩和に転換し成長重視の政策展開を行いつつある。最も深刻な状況にあるのは欧州である。ギリシャの財政問題が欧州全体の金融システム不安と景気停滞をもたらしており、今やユーロという統治機構そのものの信頼を揺るがすこととなった。バブルが崩壊し、金融機関が不良債権処理に苦しむという図式は1990年代の日本と酷似している。日本は当時、欧米から政策が小出しで実行のスピードが遅いと指摘されたが、欧州における危機対応も、各国間の意見がなかなか合意に至らず、政策実現は容易ではない。特に日本では最終的に不良債権処理は公的資金の注入により解決に向かったが、財政が悪化している欧州では政府の財政そのものに懸念が生じているため様相が大きく異なる。公的資金により金融機関を救済すると、それがさらに財政

悪化につながって国債の格下げが生じ市場からのアタックを受けることになりかねない。各国は景気低迷のもとで緊縮財政政策をとらざるを得ず、欧州経済は停滞の長期化が懸念される。

2012年の日本の課題は、短期的には震災からのできるだけ早い復興、長期的には社会保障と税の一体改革を通じた財政再建とTPPや日中韓FTAの締結など経済外交戦略の確立である。1,400兆円超の家計金融資産を有し、約94%を国内で消化している日本国債の状況は確かに欧州とは異なる。しかし日本は世界で最も早く高齢化が進展し、累積した政府債務など財政のサステナビリティ（持続可能性）には重大な懸念が生じている。早晩リスクの顕在化が危惧される。危機は突然、非連続的にやってくるというのがギリシャやイタリアの教訓である。

今回の震災を通じて日本人の絆を強く感じた人は少なくないだろう。海外からも高く評価される日本人の規律や日本独自の文化は、グローバルな時代にこそ、より価値を持つであろう。確かに日本を取り巻く環境は厳しい。日本が高齢化・人口減少の下で経済成長を実現していくとすれば、その原動力となるのはイノベーションである。一層の規制緩和を進めて国際競争に打ち勝っていけるような対外経済戦略を実現していくことが求められる。過去の経験に学び、新しいものを創造していかなければ発展することはできない。何度も厳しい国難を乗り越えてきた日本には、それを実現する底力があると思う。

理事長

武藤 敏郎